広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	バルザックとLa Chine
Author(s)	柏木，隆雄
Citation	フランス文学 , 32 : 27 - 41
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048127
Right	
Relation	

バルザックと La Chine[1]

柏木　隆雄

１．物語の構造

バルザックの作品群で中国が主体的に扱われるのは、おそらく『禁治産』（1836）だろう[2]。『私生活情景』の後半に位置するこの短編は、パリ社交界を牛耳るデスパール侯爵夫人が、その夫の財産を我が物とするため禁治産の訴えを起こし、裁判を担当する廉直で慈悲深いポピノ判事は、原告、被告双方の屋敷を訪れ、妻の驕慢豪奢、夫の真に貴族らしい生き方を見て、夫の正当性を認識するが、社交界の力関係を利した夫人の策謀で、ポピノは担当を外されて終わる。モーリス・バルデッシュが「この短編はバルザックが書いたものの中でも、おそらくは最も完璧な一つ」と評するように[3]。確かに執筆期間は、例によって数日間しかなかったと言いながら、きわめて綿密な構成で、冒頭、デスパール侯爵夫人邸に日参するラスティニャックとその親友ビアンションとで交わされる夫人についての話の中に、ラスティニャックの野心、医師ビアンションの誠実、そして医師の伯父であるポピノ判事の廉直を点描して物語の輪郭を定める。

注意すべきは、二人の会話から三十女の一般的な姿態が覗かれはするものの、肝心のデスパール夫人の実態は明らかにされず、読者の興味が宙づりにされることだ。続くポピノ判事の聖者の如き清貧の生活環境と慈善が明かされる場面は、ラスティニャックの言葉から窺われる絢爛豪華なデスパール邸の佇まいと対照的で、それだけポピノ、デスパール夫人それぞれの住居の大きな懸隔を読者に印象づける。

語り手はポピノの善行を説明する中に、彼に金を借る八百屋夫婦の、とりわけ甲斐性無しの夫を思いやる妻の姿を描き出した後、侯爵夫人の夫に対する「禁治産」

---

1 本稿は、2017 年 12 月 9 日徳島大学における日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会での発表原稿に加筆、補訂したものである。これは新しく刊行された国際バルザック研究誌 *The Balzac Review / Revue Balzac*, No.1, Classiques Garnier, 2018, pp.99-119 に« La Chine dans *l'Interdiction* de Balzac »として掲載されたが、補説して日本語論文としての本誌への掲載を支部会誌編集委員会および Garnier 社の了承を得て掲載した。

2　禁治産の語は、平成 12 年度の民法改正以降「成年後見制度」となっているが、バルザックの時代的背景を鑑みて「禁治産」としておく。

3 M. Bardèche, Notice, *Œuvres complètes* de Balzac, tome 4, éd. Club de l'Honnête homme,1968, p.49.

の告発状を、ポピノが甥のビアンションに読み聞かせる場面を置くことで、デスパール夫人の夫に対する酷薄な姿勢を浮き彫りにし、さらに「告発状」で暴かれる奇妙な侯爵自身の行動も明らかにする。

ポピノ判事はデスパール侯爵夫人邸を訪問して、夫人の若さや美貌への執着、そのための奇妙な生活習慣、社交界における彼女の隠然たる力の誇示、無邪気に見える外貌に潜む陰険な政略に気づく。そこには夫への告発状で誇示する子供たちへの愛情のかけらも見えない。夫人の収入不相応の生活を見届けたポピノは、その翌日禁治産訴追の要因である女性を尋問する。デスパール侯爵が財産の大半をつぎ込んで彼女に土地や家屋、金銭まで与えたとされる、その太って醜いジャンルノー夫人の率直なものいいに好感を抱いたポピノは、侯爵が莫大な財産を移譲する理由を確認するために、侯爵本人の住まいを訪ねる。

デスパール侯爵の住居は、冒頭のポピノが住む界隈と好一対をなすパリの下町にある。ラスティニャック、ビアンションの二人の青年が登場するフォーブール・サン=トノレの十字路から、貧民が押し寄せるポピノ判事の住まい、そしてデスパール侯爵夫人の高級貴族の邸宅、続いて下町の育ちながら今や侯爵の移譲した財産によって高級街に住まうジャンルノー夫人のポピノ訪問、さらにデスパール侯爵が二人の息子と住まう雑然とした住居と、実に対照の鮮やかな、あたかも4枚屏風の折り返しのように、4つの場面が相補い、相反する情景を呈しつつ、その内実が深まっていく。そして翌日、夫人による禁治産の告発を根拠薄弱とする判決文を携えてポピノが登庁するや、裁判所長は意外にもその担当を外す。豪奢と謙虚が対照的に交互に綴られた後の苦い現実を裏書きする結末で幕が閉じられる。

虚飾と清廉が相対立しつつ展開した挙げ句、美徳と悪徳が公然と議論され、悪徳が裁かれる裁判所において、当の裁判所長が悪徳側に手を貸して、美徳の持ち主であるポピノ、さらに高潔なデスパール侯爵、そして純朴そのもののジャンルノー夫人とその息子をも粉砕するこの結末、バルデッシュがバルザック作品中「完璧なものの一つ」と言うのも、美徳と悪徳の4つ折り屏風の皮肉な閉じ方にあるだろう。

2．モデルの存在

ギ・サーニュによれば、これら4つの場面はそれぞれ基づく所がある[4]。慈善家ポピノ判事が住むフーラール通りは、慈善者ジュール・ゴッサンが協力者と設営した救護施設をなぞり、『禁治産』執筆当時の『クロニック・ド・パリ』紙には、デスパール侯爵夫人やそのサロンのモデルとなったと思(おぼ)しい女性たちが見出される。そして妻から夫が告発される例も、『クロニック・ド・パリ』や『宮中及びフォブール・サンジェルマン淑女名鑑』にあり、また夫が別の愛人に財産を移譲する例や夫婦の係争を担当した有能な弁護士、訴訟側の夫人と法務大臣が昵懇で、夫との訴訟を有利に運んだ事実も挙げられている。

デスパール侯爵がジャンルノー夫人に財産を譲る理由として語られるナントの勅令廃止後、王の寵臣による亡命ユグノーたちの財産横領は、サン=シモンの『回想録』に例があり、バルザックが革命時の亡命貴族の賠償法にも関心を示したこともよく知られた事実だ。そうした複雑多岐な材料を巧みに組み合わせて、美しい魂の悲劇に仕立て上げたバルザックの手腕の非凡さに改めて感嘆するが、デスパール侯爵が多くもない残りの財産を使って、中国の歴史書を刊行する企図に出たのはなぜか。ギ・サーニュは、「この侯爵は完璧に過ぎる。ちぐはぐでもある。犠牲となった人々の相続人を探し、密かに彼らに財産を回復させながら、自分の家賃を支払うことは忘れ、子供たちが格闘するところを窓辺で喜んで見る。そして中国史の編纂もする。たった一人の人間には多きに過ぎる」[5]として、多くの夢を一人で描いたバルザックその人を思わせる、とする。けれども、なぜ侯爵が「中国狂」になったのか、中国狂であることが物語の展開にどのような意味があるのかの言及はない。このことは『禁治産』の他の研究者についても同様で、作家の父の中国趣味や、彼自身中国史ならぬ『生彩フランス史』を企画して挫折したことなどが言われるにすぎない。

『禁治産』における中国趣味は、はたして作者の単なる父親懐古、あるいはデスパールの偏狂的な行動の説明のためにのみ使われたのだろうか。

---

4 Voir Guy Sagnes, « Introduction » à *l'Interdiction*, *La Comédie humaine*, tome III, éd. de la Pléiade, 1976, p. 405-420. バルザックのテクストはこの版を用い、*C.H.* III と表記して引用個所の頁数を示す。

5 *Ibid.*, p. 413.

３．バルザックの中国趣味

確かにバルザックは中国に関して、素人でもなく、無知でもない。妹ロール･シュルヴィルは、父親のベルナール=フランソワが中国の文物を熟知していたと、次のように言う。

> 私の父は（おそらくその民族の歴史の古さのために）、その頃中国人に熱中し、最初に中国について書いたジェズイットの宣教師たちの分厚い書籍を読んでいた[6]。

ロールが「その頃」と言うのは、1819年バルザックの文学修行時代。ジャン=ルイ・デガの著『バルザックの父ベルナール=フランソワ・バルザックの驚異の生涯』にこうある。

> ベルナール=フランソワの死後、彼の1829年の蔵書400冊中、デュ・アルド師の『中国全誌』4巻とグロジエ師の『中国史』13巻がある。フランスで家具、磁気、青銅、織物など中国趣味の流行はベルタン首相からだが、その他にベルナール＝フランソワ・バルッサが取り憑かれたのはお茶で、これは他の多くのことがらと同じく、息子のオノレが同様にその飲み物を大好物とした[7]。

アンリ･ド・ベルタン（Henri Léonard Jean Baptiste de Bertin, 1720-1792）は、警視総監や財務総監を歴任、内閣国務大臣をも勤め、バルザックの父はその下僚として1772年から1774年まで執務、ベルタンの影響で中国趣味を醸成し、茶を扱う商売も企てたりした。その父の影響をバルザックは友人オギュスト･ボルジェの『中国と中国人』（1842）への序文で明らかにしている。

> 子供時代は、中国や中国の人たちのことを、その異国の人々を熱愛する親しい人間から聞かされて過ごした。だから15歳になると、デュ・アルド師やアルスナル図書館のノディエの先任館長

6 Laure Surville, *Balzac, sa vie et ses œuvres d'après sa correspondance*, Paris, Calmann Lévy, 1878, p. 41.
7 Jean-Louis Dégas, *La vie prodigieuse de Bernard-François Balssa (Père d'Honoré de Balzac),* éd. Subervie, 1998, p.180.

であったグロジエ師のもの、それに中国に関する多かれ少なかれ嘘っぽい旅行記の大抵のものは読んでいた[8]。

バルザックが15歳の時に読んでいた、というデュ・アルド師の『中国誌』とグロジエ師の『中国史』は、地誌から宗教、歴史、風俗にわたる極めて浩瀚なものだ。そのグロジエ師は『禁治産』でデスパール侯爵の家庭教師として彼に中国語を教えている。先のバルザックの言を信じれば、彼が読んだ中国に関する本は、これらジェズイット宣教師たちの著作だけではないようだ。ではデスパール侯爵を中国趣味に駆り立てたはずの著作、そしてバルザックが読んだとおぼしき著作はどんなものだったのか。

４．フランスにおける中国に関する記述

明代から清代始めの中国についての記述が、多くの宣教師の報告書によってもたらされる中で、ベルギー人のクプレとシチリア人のイントルチェッタによる『孔子教に対する訳者の見解』と『孔子伝』の仏訳、クプレが『論語』、『中庸』のラテン語訳も1687年にパリで刊行するなど[9]、18世紀前後からフランスの宣教師たちの活躍が目立つのは、やはりルイ14世が中国貿易の利益を考えて情報収集し、交易の手段として宣教師の派遣に力を尽くしたからだろう。清の康熙帝も欧人宣教師たちの実学的な面での有用性を認識して彼らを重用し、フランスに帰った彼らは中国に関する著作を著し、プレマール（1666－1736）は中国語の語彙と文法について『中国語考』*Notitia Linguae sinicae*を書く[10]。

18世紀中葉から、こうした派遣宣教師たちの研究成果が報告され、フランスでもそれらを研究する中国学者が生まれた。中でもデュ・アルド（1674-1743）は、青年の頃から『海外布教耶蘇会士書簡集』の編纂校訂に携わり、その記事を巧みに按配して、『中国、韃靼の地理的、歴史的、年代的、政治的及び自然記述』 *Description*

8 Balzac, *Œuvres complètes*, tome 24, éd. Club de l'Honnête homme, 1971, p.494.

9『石田幹之助著作集』第２巻、1985、六興出版、104 頁。Philippe Couplet et Prospero Intorcetta, *L'avis des traducteurs sur la doctrine de Confucius* et *La vie de ce sage chinois* (1672) 『孔子教に対する訳者の見解』、『孔子伝』、*Entretiens de Confucius*『論語』（1687）.

10 Joseph Henri Prémare（1666-1736）*Notitia Linguae sinicae*『中国語考』（未刊、のち 1831 年刊）。

géographique, historique, chronologique et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise（1735, Paris. 以後、『中国帝国全誌』と略称する）を刊行する。

５．デュ・アルド『中国帝国全誌』とグロジエ『中国誌』(1785)

デュ・アルド『中国帝国全誌』は、「欧西における支那研究史上、一つの画期的なモニュメンタル・ワーク」と石田幹之助が評するように[11]、ほぼ同年に英、独訳されてヨーロッパ知識人に多大の影響を与えた。さらにド・マイヤ（1669 - 1748）は1703年24歳で中国に渡り、『通鑑綱目』、『続通鑑綱目』を仏訳、さらにこれらの史書から漏れた明末、清初について他の文献や自らの体験を元に追補して『中国通史』*Histoire générale de la Chine, ou Annales de cet Empire* 全12巻を書き上げた。1734年65歳の彼は原稿をフランスに送り、Académie des Inscriptions et Belles-Lettres 院長ニコラ・フレレーが出版を企図するも死去、計画も途絶して原稿も忘れられた。

しかし1773年の耶蘇会解散後、偶然リヨンのGrand collège de Lyon図書館でマイヤの原稿が見つかり、後に王弟アルトワ伯の図書司書となるグロジエ師に託される。グロジエはマイヤの大著を1777年から1783年にパリで出版、さらにその2年後第13巻として、グロジエ自身がまとめた『支那誌』*Description générale de la Chine, ou Tableau de l'Etat actuel de cet Empire*を発刊、石田も激賞する著作となる[12]。バルザックの父がデュ・アルドとグロジエの大著を蔵したのも、それだけ二著の評判が高かった証であり、バルザックも中国に関する一通りの知識をそれらの本から得たに違いない。

しかしそれにしても、デスパール侯爵を、グロジエの弟子として描いたのはなぜか。中国趣味だった父への思い、あるいは中国を話題にして読書人の意表をつき、理想の世界を追求する侯爵に作家自身を仮託する、そんな作家の個人的な思いを言うだけでは、デスパールを中国通に仕立てた意図の十分な説明にはならないだろう。小説としての効果の吟味をする必要がある。

11　前出『石田幹之助著作集』第 2 巻、120～121 頁。
12　同書 126 頁。

６．『禁治産』にみる中国的要素

『禁治産』で中国について初めて言及されるのは、ポピノがデスパール侯爵夫人の夫への禁治産の告発文をビアンションに読んで聞かせる場面である。夫人はこう理由を述べる。

> ここ十年来、侯爵はとりわけ中国に関心を抱き、その風習や風俗、歴史にまで没頭、すべてを中国の習慣にするほどです。何か質問されると、侯爵は現在の事象やその前夜の出来事まで中国と関係することがらと混同してしまうのです。[13]

告発文は、中国を無闇に好む人間に対する困惑と揶揄が見られて、確かに侯爵が奇人という印象を与える。しかし侯爵の禁治産の訴因となる『生彩中国史』刊行は、バルザックが若き日に企図した『生彩フランス史』を思わせないか。『禁治産』執筆当時に彼が中国関係の書物を読んだ、あるいは読み返したとしたら、小説の構想に何らかのヒントを与えたことは間違いない。『禁治産』の一ヶ月前に発表した『無神論者のミサ』の献辞が、『中国と中国人』の著者オギュスト・ボルジェに宛てられていることも、『禁治産』における中国言及と関係しないか。テクストをよく読めば、ポピノ、デスパール夫妻が登場する場面、場面で、中国の風俗の影が巧みに落とされているのに気づかされる。たとえばデスパール侯爵夫人の特異な日常を説明する文章。

> 彼女（デスパール侯爵夫人）が家にいる時は、薄いガラス窓を通る光を防ぐ色調の中にいられるように、彼女は病気を装って、わざわざ薄暗い中に身を置くことにしていた[14]。

日光を避けて薄暗い中に身を置く夫人の日常は、グロジエが「中国の女性は、ほとんど戸外で日光を見ない。」と中国人の女性の日常を説く文章に通じる。また「中国の女性はたとえ身分の高い人であっても、自分に充てられた部屋から出ない。そこは屋敷の中でもっとも奥まったところに位置しており、女性たちが一番普通に付き

---

13 Balzac, *C.H.*, III, p.447.
14 *Ibid*., p. 451.

合うのは下婢たちだ[15]。」とあるのも、隠微な生活を自らに課して、神秘的な美を保つ侯爵夫人の怪しげなイメージの淵源である可能性を示唆する。

侯爵夫人の閨房に、グロジエが記す中国婦人の密やかな生活の描写を想起するのは荒唐無稽かも知れない。しかし告発状において夫の中国趣味への傾倒が暴かれていればいるほど、侯爵夫人の客間に飾られる豪華な中国製の壺など、彼女にも中国趣味のあることを指摘するポピノの言葉が生彩を帯びてくる。デスパール夫人の豪奢な世界は、その直前に描かれる判事ポピノの廉直な日常の裏返し、いわば正と反の図式となり、ポピノの家に押し寄せる貧しい人たちに対する彼の真摯な態度もまた、中国的視点を添えれば、デュ・アルドが説く孔子の人となりそのものである。

> 利欲、吝嗇、野心、粉飾、偽計、歓楽、美食があらゆる小領主の宮廷にはびこっていた。孔子はそれら全ての悪徳を追い払い、それに対抗する美徳を支配させようとした。彼は至る所で、自らの例を引き、教え諭しながら、それらに対抗する謙虚、寡欲、真摯、公平、忍耐、冨貴や快楽の軽蔑といった美徳を説いた[16]。

『禁治産』において、利害、貪欲、野心、快楽の追求とは殆ど無縁の人間がポピノ判事であり、さらに「彼（孔子）の廉直さや知識の広さ、その美徳の燦然とした輝きが、彼を知らしめた」とある文章は、ポピノを評する文章と一致する。

> ポピノは謙虚で高邁な知識を備えた人間で、野心はなく、疲れをものともしない仕事一筋の男だから、自分のそうした運命を嘆くことはなかった。彼は公共の利益のために自分の趣味や情を犠牲にした[17]。

さらに、ポピノが自分の住まいで貧者たちの話を一々聞いてやり、必要なお金を用立てるなど、誠実な人間性を見せるのも、デュ・アルドが伝える孔子の逸話や、『論語』の一節に見られる顔回のエピソードをも思わせる。

---

15 Grosier, *Description générale de la Chine ou Tableau de l'état actuel de cet Empire*, mise en mode texte par Pierre Palpant, www.chineancienne.fr, p.511 et p.513.
16 Du Halde, *Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise,* mise en format texte par Pierre Palpant, www.chineancienne.fr., tome II, p.588.
17 Balzac, *C.H.*, III, p.413-414.

子曰く、賢なる哉回や、一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人はその憂いに堪えず．回やその楽しみを改めず．賢なる哉回や。[18]

顔回は貧にして道を行う楽しみに生き、泰然自若として陋巷に暮らす。ポピノが貧しい区域に住んで、服装や食べ物に頓着せず、自ら信じる道に進む姿そのままだ。その彼が八百屋の上さんラ・ポンポンヌを相手に問答する場面は注目に値する。なぜわざわざバルザックは彼女との会話を長く取り入れているのか。彼女は単にポピノの親切を浮き彫りにするだけでなく、さらに重要な働きがある。

借金のために亭主は牢屋で、野菜を仕入れる金にも事欠く。健気な上さんは、次の場面に登場するデスパール侯爵夫人と対照的だ。一方は乳飲み子を抱え、牢屋の夫はあてにならず、恥を忍んで僅かな金をポピノに無心に来る。一方侯爵夫人は豪華な邸宅で贅沢三昧、夫を蔑ろにし、禁治産の訴えまで起こしている。しかしポピノの見るところ彼女には大きな借財もある。上さんとデスパール夫人とは境遇も階層も異なるが、夫の不在、借金で共通する。そこにバルザックの小説上の仕掛けがある。八百屋の上さんは太陽とともに稼ぐ。侯爵夫人は日中でも奥深い閨房で社交界の陰謀を巡らす。部屋の片隅の暗闇にいる神秘的な中国女性を思わせながら、じつはそれを一つの戦略として働かせる欺瞞を浮き彫りにするものなのだ。

しかしポピノや侯爵夫人以上に、中国文化の影をもっと多く落としている人物がいる。デスパール侯爵その人だ。

7．デスパール侯爵の中国性

侯爵夫人を訪問した翌日、ジャンルノー夫人によるポピノ訪問は、年齢不詳の美貌を誇る侯爵夫人とはうって変わって、いかにも庶民そのもので、ポピノは好感を持つ。こんな率直な女性がデスパール侯爵を騙すことはあるまい、なぜ侯爵は莫大な私有財産を惜しげも無くこの女性に与えて後悔しないのか。ポピノの疑問は、彼が1日風邪で休んだ翌日、侯爵本人を訪ねることで明らかになる。侯爵はジャンルノー母子に譲った財産は、彼の祖先がルイ14世の時代に母子の祖先である裕福なユグノ

18　加地伸行編訳『論語』2004 年、講談社学術文庫、「雍也　第六」129 頁。

一一族の財産を違法に差し押さえて獲得したものと判事に打ち明け、ポピノは、侯爵夫人がその事実を知りながら、自分の欲望のために高邁な夫の禁治産を訴えたことを理解する。

デスパール侯爵の稀有な善行は、彼の生来の美質から出たものなのだろうか。尋問を終えたポピノに、侯爵が中国歴史の刊行の企画を説明する場面に注目しよう。侯爵はこう言う。

> 私の家庭教師はグロジエ師でした。私の推薦で、シャルル十世は彼をアルスナル図書館の司書に任命したのです。王位継承する以前にアルスナルは王に返されていました[19]。

アルスナル図書館は、『禁治産』と同じ年に発表した『ファッチーノ・カーネ』の冒頭、「私は屋根裏部屋に立てこもって、夜はそこで勉強し、陽のある間は近くの図書館、王弟殿下の図書館で過ごすのが常だった」[20]と記す通り、きわめて身近な図書館であり、グロジエ師は20歳のバルザックが日参していた図書館の館長だった。侯爵をグロジエ師の教え子とするのは、彼の青春の思いを重ねるところもあったかも知れない。

侯爵はさらに次のように話を続ける。

> グロジエ師は中国に関して、その風俗、習慣など深い知識をお持ちでした。師は私をその後継者と考えていました。その頃の私は学んでいることがらに対してたちまち熱狂しないではいられない年頃でした。25歳で中国語ができるようになりましたが、正直言って彼らの征服者たちを征服してしまったこの民族に対して、深い讃嘆の念を抑えることができませんでした[21]。

つまりデスパール侯爵は、

> 彼らの年代記は、疑いもなくギリシャ神話や聖書の時代よりもはるかに遡ります。その変わることのない制度によって、領土も一体のまま保持し、歴史的建造物は巨大で、その管理も完璧です。彼らにあっては革命など不可能です。この民族は理想美を不毛な芸術原理と考えました。そ

---

19 アルスナルの図書館が王弟アルトワ伯爵、後のシャルル十世に返されたのは、1816年4月25日の勅令による。
20 Balzac, *C.H.*, VI, p.1019.
21 Balzac, *C.H.*, III, p. 487.

の豪華さと巧妙さを実に高度に発展させたので、私たちはどんな点でも彼らを追い越すことはできません。一方、私たちが優れていると思っている物でも、やっと中国と同等なのです。[22]

と説くように、グロジエから中国語や中国の制度、文物を教えられて中国崇拝者となったのだ。彼の言葉はグロジエの著作を徹底的に読んだことを示すとともに、その思想や行動が中国思想によって形作られたことを明らかにする。それはバルザック自身のグロジエ理解をも示すだろう。デスパール侯爵が不当に得られた財産に苦悩するのは、グロジエの次の言葉が大きく作用するからではないか。

不義にして富み、高きは、我に取って浮雲の如し[23]。(『論語』、「述而編、15」)

まさしくデスパール家の財産と地位は、「不義にして富み、高き」ものだった。グロジエが「もっとも教養ある、最も賢明な、そしておそらくはその名にもっとも値する哲学者の一人[24]」とする孔子の一節を、デスパール侯爵は践んでいるのだ。デュ・アルドの孔子伝には、「徳ある人間は偽物までも信じさせられることもあるが、しかし悪事を行うまでには至らない。」とあり[25]、『論語』の「子曰く、過ちて改めざる、これを過ちという」の一節(「衛霊公」第15)は、侯爵に切実に響いたはずだ。まさしく祖先の過ちを改めることによって、侯爵は不義の財を正統な持ち主に返したのだ。そこに彼が信奉する中国道徳の実践がある。子供の教育についても同様だ。

夫人と別居した侯爵は、モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ街で二人の息子と暮らすが、それこそfou des enfantsと自分で言うほど緊密な関係を保っている。

もし、おかしい人間がいるとしたら、おかしい人間がいるとしたら、あの子供たちのことでしかないでしょう。父親に夢中で、父親も自分の子供たちに夢中なのです[26]。

---

22 *Ibid.* なお吉川幸次郎『古典講座「論語」』に神を最終決定者とするキリスト教的世界と人間文化を背景とする中国の儒教的世界の相容れざる観点を説く文章があり、侯爵の言葉を思い合わせると示唆されるものがある。
23 デュ・アルドの著作では[不公平な手段で手に入れた富は、空中にあちこち風に吹かれる雲のごときもの]と書かれる。Du Halde, *op.cit.*, III, p.606.
24 Grosier, *op.cit.*, p.57.
25 Du Halde, *op.cit.*, II, p.60.
26 Balzac, *C.H.,* III, p. 489.

この言葉にも中国のいわゆる父子関係の強固さ、piété filialeが浮かび上がってくる。「孝行は中国の最も古い哲学者たちによって推奨されていたが、時に忘れられていたのを、有名な孔子の教訓によって厳格に定め直されることになった」[27]とグロジエにある。

侯爵の住まいをポピノが訪れた際、門番女はデスパール親子の緊密さを非難するが、侯爵の子供に配慮した念入りな教育がそこに見られる。たとえば、

> デスパール卿が住まうのは一階で、おそらく庭を眺める楽しみがあるためと思われる。（中略）また南に面する二つの利点が、彼の子供たちの健康に無くてはならない要素として働いた。（中略）そこはちょうど学校群がある中心で、子供の教育を見守ることができる[28]。

いかにも周到な教育的措置だが、こうしたデスパールの息子への厚い配慮は、バルザックの他の主人公には見いだされないものだ。中国の賢者の故事がここで想起される。すなわち「孟母三遷」。孟子の母は子供に最も良い環境を探して3度引っ越し、学校近くに住まって孟子は勉強を始めたという。中国通として造型されたデスパール侯爵が学校のある界隈に居を定めるのはまことに似つかわしい。逸話の原典である劉向の『烈女伝』（紀元前21）について、デュ・アルドに「『烈女伝』は諸王朝において中国婦人の行動の規範となり、その家族を支配した」とある[29]。

住居の 4 階は『生彩中国史』の作業に 3 部屋宛てられ、そのうちの事務室に侯爵が日中いるところに、授業を終えた子供たちが帰ってくる。子供の教育にあたって、侯爵は他人とのあらゆる接触を防ぎ、長男には「東洋の言語やヨーロッパの外交法、そして紋章学、歴史の原資料、さまざまな憲章、原典、王令などを使って歴史を教えた」[30]。

これは、ポピノ判事がデスパール夫人訪問の際に子供との関係を問うた個所ときわめて対照的だ。ポピノが夫人の暮らしの贅沢さに触れて、「なるほど、こういう所に

27 Grosier, *op.cit.*, pp. 410-411.
28 Balzac, *C.H.*, III, pp. 471-472.
29 Du Halde, *op.cit.*, tome I, pp. 36-37.
30 Balzac, *C.H.*, III, pp. 472-477.

いらして、あなたのお子様たちがひどい所に住み、粗末な衣服を着て、ろくなものも食べてないとなれば、ずいぶんお苦しみでしょう。母親にとってこれほどひどいことはまずありませんな！[31]」との皮肉に、夫人は「そうですの。私、あのかわいそうな子供たちに何か楽しみを与えてあげたいと本当に思いますわ。朝から晩まで父親が中国についての嘆かわしい本で勉強させているのですもの！[32]」と答える。夫の中国式の教育への非難をその妻デスパール夫人に強調させることで、夫婦の相違をみごとに浮き彫りにする。

というのも師グロジエが説く中国における父親の存在の重要性が、侯爵の言葉から自ずと思い起こされるからだ。すなわち、

> 朱子はこう言っている。自分の子弟に立派な教育を施すことは、沢山の富を集めてやるより遙かに良い。もっと大事なことは、子弟の絆をしっかりと見守ることだ。（略）道徳においても同様だ。学校では良い教師を、友達も良く選べば、おのずと善に向かい、師や友人のように、徳あり、賢明になる[33]。

中国的教育を思い起こさせるのはそればかりではない。ポピノが侯爵を訪れた朝、子供たちが庭で取っ組み合いをしている。それを嬉しそうに見ている父親を門番の女が非難するこの場面は、おそらく孔子が庭を走って遊びに出かけようとする長男鯉に向かって勉強したかと問う、『論語』第 16、季氏の一節、「庭訓」の語の由来となる故事を踏まえた描写に違いない。じっさい父親に対する二人の子供の受け答えは、儒教そのままであり、威厳を保ちつつ、愛情溢れた侯爵の子供たちへの態度もまた理想的な父親の姿を示す。まさしくグロジエが中国の教育の要点を尽くす「一家の父親は、子供の行動に責任がある。召使いの者たちに対しても同様だ。[34]」の言葉を思い起こさせる。まことにデスパール侯爵はグロジエ師の恥ずかしからぬ弟子と言えよう。

---

31 *Ibid*., p.462.
32 *Ibid.*
33 Grosier, *op.cit.,* p.401.
34 Grosier, *op.cit.,* p.385.

8.『禁治産』に隠されている中国趣味の意味

バルザック『禁治産』における登場人物の言動に中国的要素が隠されている事実は、父ベルナール=フランソワに対する作家の情や、若き日に日参したアルスナルの図書館の館長へのオマージュを示す以上に、バルザックが中国学者のデュ・アルドやグロジエの著作を、単に名を出すだけでなく、きっちり読んでいたことを示す。

注目すべきはこの物語の結末だ。デスパール侯爵の謹厳な、しかも貴族にふさわしい廉直さに感動したポピノは、まさしく自分と同じ人間を見出す。「士の道に志すや、悪衣、悪食に恥じるものは、未だ共に議するにあらず。」(『論語』、「里仁」)の語がふさわしい二人は、心からの握手を交わし、ポピノは「禁治産」の訴訟の無効を確約して侯爵の住居を辞去する。

ところが翌日、ポピノはデスパール夫人の内意を受けた裁判所長から担当を外され、新任の裁判官が意気揚々と現れて物語は閉じる。訴訟はデスパール侯爵夫人の勝利に終わり、侯爵が友人の亡命貴族のために企画した『生彩中国史』全12巻の刊行も停止のやむなきに至るだろう。この惨憺たる、しかもあり得べき結末は、高潔なポピノや徳義あるデスパール侯爵の二人が、あたかも中国の賢人孔子、その愛弟子顔回の面影に通じるだけに、彼ら賢人の運命を想起させないではいない。デュ・アルドによる孔子像にはこうある。

> 彼の行動は、決してその教義と違うことなく、重厚で謙虚、温和、質素であり、財産への軽蔑、自己の行動に細心の注意を払う、著書や行いで教える教義を孔子は全身で表明していた[35]。

これはそのままデスパール侯爵の人となりに通じよう。また「孔子が次いで諭すのは、人は表の行動でその美徳を判断してはならない。なぜならそれらは見かけの徳にほかならない。真の美徳は心情と真っ直ぐな性質にある[36]。」は、デスパール侯爵に、また廉直の判事ポピノにもそのまま当てはまる。

しかし孔子はついに世に受け入れられず、生前、自説を諸国の権力者たちに説いて廻りながら、一時的に歓迎されても、結局その廉直に応じられる諸侯は殆どい

35 Du Halde, *op.cit.*, tome II, pp. 590-591.
36 *Ibid.*, p. 605.

なかった。デュ・アルドの孔子伝に「孔子は何度か諸侯に理性と義務に立ち戻ることを説いたが、自分の努力が無に帰したのを見届けると、俗臭紛々たる公のいる宮廷には無用と見て宮廷から身を引くことを決した[37]。」とある。

ポピノもまた誠実無比の裁判官であるにも係わらず、また彼の上司もそれを十分に承知しながら、結局上流社会の欲望の渦に翻弄されて、彼は渦中の裁判から外され、意に染まぬまま表舞台から去らざるを得ない。孔子の絶望的な運命と同じものを、デスパール侯爵もポピノ判事も嚙みしめることになる。

『禁治産』は、あくまでパリの高級貴族の「私生活情景」の一つを描き出そうとした作品であることに間違いない。けれどもその背後に、登場人物をフランスの代表的中国学者の愛弟子に設定して、中国の歴史や思想に共鳴する人間の姿を描き出すことによって、かえって当代フランス、パリの貴族社会の欺瞞を映し出す鏡としての役割を果たさせたのではないか。中国流の聖人君子の生き方が否定されるこの物語の展開に、バルザックの隠された意図が垣間見られないか。

『禁治産』が 1836 年に執筆されたことを思い起こそう。その 4 年後にアヘン戦争が起こっている。『眠れる獅子』として遇されてきた中国は、ヨーロッパ列強の利害がひしめき、その豊かな財は、各国の虎視眈々と狙うものだった。その中国をフランス以上に優れた国として信奉する、中国文化を体現したかの如きデスパール侯爵は、フランス上流社会の悪徳に染まった侯爵夫人の悪辣な策略によって、その財、地位を奪われようとする。当時のヨーロッパ列強の思惑を、物語の登場人物たちの動きに重ねてみれば、作者の強い寓意がそこに感じられはしないか。19 世紀小説の常識としては意表を突く中国趣味に没頭したデスパール侯爵の造形は、それゆえにこそこの短篇の中で意味深く、廉直なポピノのデスパール侯爵への共感もまた感動をもって読者に響くのではないだろうか。

37 *Ibid*., p.589.